

ロビー・ロバートソン・インタビュー

●聞き手：マイク・ラゴーニャ

●こんにちは、ロビー。

ハロー、マイク。連絡ありがとう。

●ニュー・アルバム『How To Become Clairvoyant』（“先を見る目の持ち主になる方法”の意）は内容こそパーソナルですが、「魔法使い」みたいなタイトルが付いていますね。でも、このタイトルはまた、これまでの人生を振り返ってみると、一寸先にどんなことが起こるのかを自分は常に見据えていた、とも言いたげです。

（笑）そう、その通り。皆が持ちたいと思う能力の中で、先を見る力はその最たるもので、それをどう手に入れるかも最たる問題だ。

●アルバムのトップを飾っている「Straight Down The Line」では、「黎明期のロックンロールが悪魔の音楽と呼ばれていた」ことに茶目っ気たっぷりに触れ、音楽のさまざまなスタイルが見事なくらいに集まり、歌詞も音楽の歴史に踏み込んでいますね。

ある世代にとっては、これが最初の音楽的革命だった。ロックンロールの始まりはああいう感じであって、あの頃は悪魔の音楽と呼ばれていたんだよ。私は長年ずっと、次のような対比を楽しんでいたんだ。私がまず書いているのは、ソニー・ボーイ・ウィリアムソンと初めて会った時のことだ。それから、マヘリア・ジャクソンやフランク・シナトラについても書いている。ソニー・ボーイは「いや、俺はブルースマンで、ブルースをプレイしてるだけさ」って言っていて、マヘリア・ジャクソンもこの件について自分の立場を崩さなかった。というのも、黒人社会にはブルースとゴスペルがあって、レイ・チャールズが昔やったように、この2つを混ぜ合わせるなんて非常にいかがわし

いことだったんだ。マヘリア・ジャクソンは「私はロックンロールは歌いません」で言ってたし、フランク・シナトラは「この歌は6カ月間この世に存在し、その後は永遠に消え去ってしまうだろう」って発言した。こうした大胆な発言の中の何かが、長年、私の頭にこびりついていたので、これで曲を書いてみようと思ったわけさ。

●ザ・バンドは最高の「アメリカーナ」のグループだったと思いますか？

私が昔そんなこと言ったのかどうかは知らないけど、人々がザ・バンドのことについて話す際に、そう言ってるのは知ってるよ。いつも不思議に思っていた。だって、私はカナダ出身なんだから。北アメリカ大陸の北のほうの出身さ。このドアを開き、音楽におけるアメリカ神話と呼ばれているこういう音楽を書いていたのが私、みたいな言われ方だよ、いつも。最初にロニー・ホーキンスのバンドに加わってカナダからアーカンソー州に行った時には、音楽の本拠地はミシシッピのデルタ地帯にあった。私はロックンロールの聖地に向かった。その100マイルの圏内から、私の好きな音楽の全てが生まれていたからだ。16歳の時にそこに行って、大きな影響を受け、自分の中にその全てを溜め込んでおいた。腰を据えて曲を書く時が到来すると、アイデアの詰まったトランクに手を伸ばして、あれやこれやを取り出したんだ。「これからアメリカ音楽を書くぞ」なんて言ったりはしていない。どんなものがアメリカ音楽なのかも知らなかったしね。私はただ、蓄えておいたもの、最も感銘を受けたものを曲にただけさ。そういうふうに来たんだよ。あの頃はああいうミュージシャン達と一緒に仕事をしてたので、あらゆる曲を皆で演奏出来るようにした。私達全員の音楽性、声、バックグラウンド、こうしたもの全てを考慮に入れた上でだ。『Music From Big Pink』を出す7、8年も前から、私達は一緒に練習をしてきたし、私達にとっての練習とは、全国を旅して演奏活動をしながら、さまざまな音楽を吸収してきたことと大いに関係がある。『Music From Big Pink』が発売された時、人々はそ

の中にマウンテン・ミュージックやゴスペル・ミュージック、ブルース、ロックンロール、リズム&ブルースを聞いた。このアルバムは、こうしたものの全部が入ってる音楽の大きな団子みたいなものだった。腕を磨きながら、そうした音楽を自学自習していたからだ。

●さまざまな音楽スタイルを融合させたことで、ある世代のアーティストや文化に大きな影響を残した結果、ザ・バンドは一種のアマルガムと評されるようになったのですね。

その通り。ザ・バンドの音楽の自分達のバージョンをやろうとしているんですって言うてる若いバンドが今もいるよね。これは最高のほめ言葉だと思うよ。自分の音楽が生き続けてるんだから。今私がやっている音楽の中で、「When The Night Was Young」は、今話題にしている時期を回想したものなんだ。1960年代後半のアメリカの若い世代、究極的には世界中の若い世代が、当時の世相に大きな影響力を持っていた頃だ。1960年代後半は戦争の真っ最中で、ウッドストック・フェスティバルに来ていた人やアメリカ中の人が、「俺達は反対だ。立ち上がって、世の中を変えよう」と言い、そのように行動した。戦争をやめさせなければならなかった。悪いことだからだ。現代の若い世代が同じようなスピリットの力を示すのを見たいね。今の状況はああではないし、私達が登場したのがケネディ兄弟やマーティン・ルーサー・キングJrが暗殺された時代だったからこそ、とても強力なやり方で、音楽が人々をひとつにしたんだ。音楽はあの時代の声だった。

●『Entourage』というテレビ番組の中でサイゴンというラップ・アーティストがインタビューで語っていたのですが、彼も「スピリットはどこに行った？」とあなたと殆ど同じことを言ってました。今の人は、気を逸らされてるのかもしれませんがね。皆が注目すべき大切なことが、世の中に存在するあらゆるものによって薄められてしまっているので、何を信じていいのか本当に分かりにくくなってしまっています。

す。

そうだね。今、この国ではさまざまな文化に分離してしまっていて、調和や一致なんて流行りではない。

●かつては「The Weight」はカウンター・カルチャーのアンセムとして使われていて、「The Night They Drove Old Dixie Down」には反戦の感情が込められていると思われていたが、こうした曲の中にある物語を追ってみると、こうしたテーマをあからさまに歌っているわけではありませんよね。

私がザ・バンドでやっていた音楽には、本質的にどこかとても反抗的な性質があった。以前にはああいう音楽はなかったし、トレンドイでもなかったし、当時人気があったものでもない。音楽はとても攻撃的で、私達が自分の親と写真を撮っている時、他の人々は親を殺す歌を歌っていた。愛国的なことをオルタナティブなやり方でやろうなどという考えは、当時はまったく聞かなかったから、私達は反抗に対して反抗してたんだね。

●うまい言い方ですね。ところで、今回のアルバムでは素晴らしいゲストを迎えています。『Clairvoyant』のきっかけとなったのはピノ・パラディーノとイアン・トーマスというリズム・セクションと行なったセッションで、2008年にロンドンでレコーディングしたのだから。

そう。エリック・クラプトンがこっちでレコーディング出来ないかになって言ってきたんで、私がロンドンに行ったんだ。このアルバムはエリックとアイデアを弄ぶことから始まった。私達は旧友で、しばらく前から何か一緒にやろうって言ってたんだけど、そのこと以外は特に何も念頭になかったんだよね。数年前にエリックがロサンゼルスに来た時、いろんなアイデアを出したり、人生について語り合ったりし

た。こうしたものがアイデアの芽となり、メロディーや歌詞になっていったんだ。その後、エリックは日本ツアーに向かい、私は映画のプロジェクトがあったので、お互いそれっきりになり、一緒にやった作業のことは忘れてしまったんだ。それからしばらくして、私はこの音楽をたまたま発見したんだけど、ここまでやってたとは思ってもいなかった。それで、私はエリックに電話をかけて、「あのマテリアルを聞いてみたら、一部は思った以上に出来上がっていた」って伝えたんだ。返事は「知ってるよ」だった（笑）。一過性のことだったから、私はここまで作業をやったなんて思ってもいなかったんだ。すると、エリックは言ったんだ：「ねえ、アイデアをもっと練って、どうなるか様子を見てみようよ。ロンドンに来て作業をやらないかい。ピノとイアンとキミと俺でさ。キーボード・プレイヤーが必要なら、スティーヴ・ウィンウッドが来れるかどうか訊いてみよう。たぶん、手伝ってくれるんじゃないかな。」って。私はプロダクションを手伝ってもらおうと思ってマリウス・デ・ヴリーズを連れて行った。このアルバムで私達が表現しようとしていたことをやるのが、とても得意な人物だからね。ロンドンには3週間行って、アルバムに収録された全曲と、他にもいくつかのトラックを録音した。すると、エリックは言ったんだ：「ここで曲の大部分を書いたのはキミなんだから、これはキミのレコードだと思うよ。俺は協力出来れば、それだけで嬉しい。プレイしたり歌ったり、俺にやって欲しいことがあったら何だってやるよ。」って。非常に素晴らしい申し出だったね。私はただちにマーティン・スコセッシの映画『シャッター・アイランド』の音楽に取りかからなければならなかったんだけど、私が考えていた映画用のアイデアは、現代音楽の作曲家を起用したいってことだった。ロンドンでやっていたこととはかなりかけ離れた音楽だったので、驚くべき体験で、とても勉強になった。このタイプの音楽を深く研究しなければならなかったからね。全部気に入ったけど、自分がこれまでにやって来たことから、一番かけ離れたところまで行ってしまったので、再びこっちに戻って来た時には、誰と一緒に作業をしたいか、頭の中には明確なアイデアが出来ていた。エリックと一緒に始めたプロジェクトなので、

マテリアルの多くは極めてギター中心だった。ところどころで歌ったりもしたけど、ギターを弾いてる時には、2本のギターが本当に会話をしているようだったので、私はそれを継続したかった。

レイジ・アゲンスト・ザ・マシーンのトム・モレ口のギター・プレイは聞いていて本当に愉快だった。彼はこの楽器で普通でないこと、私が普段やってることとは全然違うことをやるギタリストだ。私はトムに「Axman」を一緒にやってくれないかってお願いしたら、OKが出て、素敵な体験をすることが出来た。それから、最高のペダル・スティール・ギターを弾くロバート・ランドルフにも、一緒にやってもらえないかってお願いした。全てのギター・プレイヤーの中でこの2人を選んだ理由は、どちらも素晴らしいプレイをするから、そして、彼等がどんなことをやってくれるのか見当もつかなかったからだ。ずっとギターをプレイしてきた人間なら、そんなこと分かるはずだと思うだろう。でも、分からないところに魅了されたんだよ。つまり、別のギタリストの前に立って一緒に演奏し、しかも、相手がどういう音を出してくるのか分からないという状態にね。彼等との作業はスリリングな体験だったよ。私は個人的に彼等に敬服している。それから、トレント・レズナーとも同じようなことをやったんだ。私はマーティン・スコセッシとたくさんの仕事をして、歌を添えたりしてきたけど、その多くは映画用の音楽だった。私はこの2人の世界を完全に分けることは出来ないし、そんなことしたくもない。トレント・レズナーは映画の仕事をしたいなあと思い始めたらしく、彼が最近やっていることの中には非常に映画的なものがある。私はトレントに作業中のトラックを手伝ってくれないかとお願したところ、素晴らしい仕事をしてくれた。彼は非常に予想外なことをやってくれた。それこそ私の狙い通りだったんだけどね。音楽において、コラボレーションというのは極めて重要なことで、このくらいの腕前の人と共演することが出来るとなると、さらに効果は高まるんだ。

● 「Axman」がとても面白いのは、さまざまなギタリストへのトリビュートであるということと、あなたが名前を挙げているのが、これ

までに多大な影響を与えてきた古典的ギタリスト達だという点です。

多くの人に大きな影響を与えた今は亡き偉大なギタリスト／シンガーに、敬意を表しているんだ。こうした人々全員へのトリビュートとして、トム・モレロと私でやったことなんだ。デュアン・オールマン、スティーヴ・レイ・ヴォーン、それから、歌詞の中ではジミ・ジェイムズって呼んでるんだけど、ジミ・ヘンドリクスについても歌っている。私がジミと会った時には、彼はジミ・ジェイムズという名前で活動してたんだよ。RJっていうのはロバート・ジョンソンだ。ジャンゴ・ラインハルトやリンク・レイも出てくる。もし彼等がいなかったら、私達は今こんなことをやってないだろうね。そんなギタリストをたくさん登場させた。彼等に敬意を表すべき時だって感じたんだ。

●「先を見る目」というテーマに関してですが、現在中近東で起こっていることを予測出来た人はいるのでしょうか？

ことの発端はこうだという具合には極めて予測不可能だったと思うね。『60ミニッツ』で見たけど、チュニジアで、国民をないがしろにする政府に我慢がなくなってきた男が、自分が犠牲になろうと思い、政府のビルの前に行って焼身自殺を図ったんだ。それでチュニジアで蜂起が始まって広がり、革命が起きたんだ。指導者達のせいで人々は長い間窮地に立たされていたんだけど、今では、中東全体で革命の気運が高まっている。

●事態がその地域にとって最も良い具合に収まればいいですね。

そうだね。今回の件で皆がじっくり考えたんじゃないかな。現在リビアで起こっていることは、昔だったら想像もつかないことだけど、今、そこの人々は驚くほどの大変化に直面している。きっと良い結果が生まれるだろう。求めているものを見出すのにたとえ時間がかかるとしても、旧態を取り除いて新しいものを取り入れることで、良い結

果が得られるはずだ。

●革命が起こっているとなると、中東の石油には頼れなくなるので、代替エネルギーが注目され、議論されるようになるでしょう。石油会社に対しても財政的、政治的圧力が加わるはずですよ。

一連の出来事は正しい炎に油を注いでいると思うよ。

●美しい表現ですね。さて、『Clairvoyant』には話題にしにくいことをダイレクトに扱った曲がありますね。「This Is Where I Get Off」はザ・バンドを辞める別離の歌ですが、これは触れてほしくはないことですか？ この場で話してもいいことですか？

君の言う通り、このことを歌にしたのは今回が初めてだ。人前でこの件を話したことはあまりなかったし、曲の中で話をしたことも皆無だった。この曲は、書いてる間に、徐々に本性を表してきたんだ。最初はアイデアの胚芽状態でしかなくて、どんな方向に行くのか分からないんだけど、そのうち正体を現して、たどるべき方向を教えてくれるものがある。この曲を書き始めた時には、どっちに行くのか分からなかったけど、書き進めるにつれて、この件を話して、ザ・バンドを離れたのは私の本意ではなかったとこういう形で打ち明けることが出来て、私の心は解放された。この曲の中で「仲間を見捨てるなんていうのは、全く計画に入っていなかった」って言うてるんだけど、その通りだったからさ。『ザ・ラスト・ワルツ』の後、皆はそれぞれやりたいプロジェクトがあって、違う方向に行ってしまった。皆、新たな気分で何か別のことをやりたいと思ったんだ。そして、その後でまた結集して、曲を書いて、素敵な音楽をやろうっていうアイデアがあったんだけど、皆、どこかに行っ自分のことをやっていて、誰も戻って来なかったんだ。「そういうことさ」っていう感じだったね。当時は、それに誰も悪意は感じていなかったと思う。「今は皆、自分がやりたいことをやってるのさ。準備が出来た時には再び集まって、やる



べきことをやろう。」っていう気持ちだったはずだ。でも、現実にはそうはならなかったんだよな。誰も元の道を引き返して来ないで、違うことが違う場所で進行していたんだ。私が立ち上がりざまに「ザ・バンドをやめるぜ」って言ったわけじゃないんだよ。そんな事実はない。『ザ・ラスト・ワルツ』だって、当時のオン・ザ・ロードのライフスタイルの終止を宣言したものだだったんだ。

●『ザ・ラスト・ワルツ』では、当時活躍していたミュージシャン全員がザ・バンドに対してトリビュートしていますね。

そうだね。でも、あれが『ザ・ラスト・ワルツ』と呼ばれたのは、皆が「この章は終わりにしよう。深呼吸をして、自分の体を大事にしよう。新しいカードでプレイしよう」って考えていたことに由来するんだ。私達はトランプをシャッフルする必要があった。あの頃にしたのはそういうことであって、誰かが何かを辞めることじゃない。でも、うまく行かなかった。「我々は目の前にある道を進む」っていう言葉があるだろう。当時の、もし全員が再結成を望んでいたなら、そうになっていただろう。私達は周囲からのさまざまな信号を読み取っていたので、私の選択でも誰かの選択でもなかった。結局、あんなっちゃっただけなのさ。

●その後、あなたは数々の映画音楽を監督しましたね。それから、ニール・ダイヤモンドの『Beautiful Noise』をプロデュースしました。

これも意表をついた方向転換だったよね。でも、このような意に反したチャレンジが、普段の日常生活で見出すことの出来るものを超越したクリエイティブな精神を引き出してくれることがあるんだよ。ニールとの作業は単なる左折さ。心から楽しんだよ。ニールは素晴らしい人だ。彼は今年、ロックンロール・ホール・オブ・フェイムに殿堂入りする予定だ。ニールを入れると長い間ず叫び続けてたので、やっと実現して嬉しいよ。

●『Carny』『Raging Bull』『King Of Comedy』『Color Of Money』ではマーティン・スコセッシと仕事をして、チャック・ベリーの『Hail! Hail! Rock'N'Roll』ではコンサルタントを務め、その後、ザ・バンド解散後のプロジェクトの中で私が大好きなソロ・アルバム『Robbie Robertson』を出しました。このアルバムには、ロッド・スチュワートが歌ってヒットした「Broken Arrow」のオリジナル・バージョンや、「Showdown At Big Sky」「Somewhere Down The Crazy River」「Testimony」といった代表曲があります。次の『Storyville』にはブルース・ホーンズビーとコラボした「Go Back To Your Woods」がありますね。

あれは楽しかった。ニューオーリンズでレコーディングして、現地の人と一緒に作業をやったからね。私はニューオーリンズの音楽と伝統の大ファンなので、あれは素晴らしい人生体験だったよ。

●その後、キャピトル・レコードに移籍して、さらに2枚のコンセプト・アルバムをリリースしましたが、ひとつはネイティブ・アメリカンの文化遺産を扱ったものでした。

そう。あの頃、『ザ・ネイティブ・アメリカン』というドキュメンタリー番組が放送されていたんだけど、それを後ろで仕切っていたのがテッド・ターナーだった。それで、ドキュメンタリー・シリーズの音楽を担当しないかと頼まれたんだ。私もそうした文化遺産を受け継いでいる人間だからってことでね。自分の音楽のこうした部分に戻って深く掘り下げることが出来たのは、素晴らしい機会だった。私の音楽の始まりはシックス・ネイション・インディアン保留地だったからね。そこで私は音楽に興味を持ったんだ。だから、これは私にはフル・サークルの完成という意味があって、そういう方面のドアを開いてくれたもうひとつの人生体験だった。このプロジェクトではたくさんの素晴らしいネイティブ・アメリカンのミュージシャン達と作業を行

なった。私は自分がやりたいことでだけでなく、ドキュメンタリーに合う音楽もやったんだ。それから、『Contact From The Underworld Of Redboy』っていうレコードも作ったよ。これに関してはPBSがアルバム制作のドキュメンタリーを作ったから、もうひとつのレコードとは反対の体験をしたわけだ。この2つの体験にはとても感謝している。超楽しかったからね。今回のアルバムも、これまでの人生で最も楽しかった音楽制作体験のひとつだった。本当にやりたいことが出来て、最近とても気分がいいんだよ。やらなきゃいけないとか、やることになってるんじゃないなくて、本当にやりたいことをやったんだ。しかも、それをしてとても楽しかったんだ。

● 『...Clairvoyant』を聞いていると、時々ザ・バンドのアルバムを聞いているような感じがするのです。その理由を考えてみたのですが、プロダクションとテーマの点でそうなんじゃないかと思います。最初の2枚のソロ・アルバムは、内容の点でも、あなたと一緒にリイシューの作業をやったという点でも、私にとって非常に大切な作品です。でも、今回のアルバムには大変魅了されました。

ありがとう、マイク。君からそういう言葉を聞けてとても嬉しいよ。

● どういたしまして、ロビー。ザ・バンド時代もしくはソロ時代でも気に入っているレコーディングは何ですか？

一番気に入ってるギターを選べっていうようなもんだね。曲にはさまざまな存在理由があるから、ある特定のものだけをピックアップするのは難しいね。私はいろんなアルバムを作ってきたけど、こうしたアルバムには完全なストーリーがあって、曲はストーリーの中の章だと考えたいね。だから、今の質問は「あなたの本の中で一番好きな章は何ですか？」って質問されたようなものなんだ。アルバムは本のようなもので、ある部分だけを切り離すなんてことは出来ないね。

●ザ・バンド時代のロビー・ロバートソンと今のロビー・ロバートソンとの大きな違いは何だと思いますか？

今のほうが昔より賢くなってるといいね（笑）。失敗から何かを学んでるといい。音楽をやることの楽しみを本当に理解している境地にやっと達したとも思う。ただ汗を流しているだけで、音楽を本当に楽しむことを忘れてしまっていることが多々あるだろ。今では、天からの授かった才能と、人々とそれを共有出来る機会に、日々感謝しているよ。今はこういう境地に達しているけど、昔はそうじゃなかったな。

●新しいアーティスト達にアドバイスはありますか？

新しいアーティストへのアドバイスは、音楽をクリスマス・プレゼントのギターのように扱うなってことだね。自分のやってることに対してしっかりと熟成期間をかけて、先走り過ぎないことがとても大切なんだ。自分の音楽を十分に練って、深みを加えよう。そうすることで、自分の音楽や作品の寿命が伸びる可能性が生じると思うね。

●レコード産業を取り巻く環境はここ数年において激変していて、数多くのレーベルが店仕舞いをしている一方、DIY的なアルバムやシングル、ビデオがますますたくさん登場しています。DIY的なアプローチはアーティストに対してかつてないほどの自己表現力を与えていると思いますか？ それとも…。

君が言おうとしていることはよく分かる。ザ・バンドが活動初期に行なったアプローチがまさにそれだった。何年も前にウッドストックのピンク色の家の地下室で、ベースメント・テープスと呼ばれている音楽を作っていた。これは他のアーティストが曲をレコーディングするためのデモにするつもりだったんで、一般の人には聞いてもらう予定はまったくなかったんだ。あの音楽は、音楽を録音するにはあらゆる点で間違っている環境で作られたものだ。コンクリートで出来た地

下室で、真ん中には大きな金属性の暖炉があった。どこで何をやってもいい。ザ・バンドはその典型だった。私達は自分たちの環境でレコードを作ったけど、今では皆がそれをやっている。パーソナル面、プライベート面では大きな利点があると思うね。レコードを作るにはプロフェッショナルな環境にいないとダメだという考えには、私はそれほどあこがれてはいない。音楽は寝室でも作れるという考えでやると、パーソナルな何かが付加わると思うよ。そういう利点は、私はとても好きだなあ。いかなる基準も満たさなくていいとなると、悪影響をもたらすこともあるから、こうしたことは常にバランスを取らなければいけない。今日の音楽業界の動向からすると、私達は新モデルの音楽のために準備を整えてるところなんだ。今は何かの中を通過中で、向こう側に出てみたら、凄いことが起こっているといいね。今はそれに向かって地中を掘り進んでいる状態なのさ。引きこもり用の音楽を求めてそんなことしてるんじゃないからね。

●『How To Become Clairvoyant』を作った人物に適していると思う質問がもうひとつあります。次の1年ほどの間にどんなことが起こると思いますか？

恐らく2カ月以内に、私は自伝を書き始めるだろう。これは出来るだけ早く取り掛かる必要のあることだ。ある出版社と契約したからね。自伝の執筆はずっと昔からやりたいと思ってたことだから、とても楽しみだ。今の段階だと、教えることが出来るのはこんな話があるということと、今回のアルバムがその点で大変役に立ったということだけだ。さっきも話した通り、このアルバムは私がこれまでに作ったどのアルバムよりも思索的かつ私的なものだからね。

●ロビー、面白いお話をいろいろ聞かせてくれて、ありがとうございました。

君もお元気で。